

連載 104 数量に関する方言

今年も早11月となり、あとチヨッコシ(少し)を残すのみとなりました。今回は、小松での数量に関する方言を取り上げます。

量が多いことと少ないことを表す方言

量の多いこと、つまり「たくさん」ということを表す方言には、「デカイ(コト)」に由来すると考えられるデカト(尾小屋・安宅)、デカト(尾小屋、デコト(符津、デーコ(大杉、デックイコト(大杉)などのほか、「ヨケー(余計)」に由来すると思われるヨーケ(大杉・尾小屋・符津、「イッパイ(一杯)」の音変化形エツペ(尾小屋・符津、さらにタント(符津・龍助)など、多くの言い方が聞かれます。それぞれ、タンポデコト、アル(田んぼがたくさんある)、ヨーケ、モロタ(たくさんもらった)、オチャワ、エツペ、ツグモンデネ(お茶はいっぱい注ぐものではない)、タント、ヒトガ ヨットルヨー(たくさん人が集まっ

ている)のように使われます。

反対に、量が少ないこと、つまり「少し」ということを表す方言には、チヨッコ(大杉・尾小屋・符津、チヨッコリ(尾小屋・符津・龍助)、チヨッコシ(符津・安宅)などがあります。これらもそれぞれ、モーチヨッコデ、スنداガニ(もう少しで済んだのに)、チヨッコリシカ、ナイ(少ししかない)、チヨッコシカ、フランダ(少ししか降りなかった)のように使われます。

そのほかの数量に関する方言

数量というよりも基本的には程度の甚だしいことを表し、それが時には数量的な多さも表す方言にテンポがあります。テンポは形容動詞的に、テンポナ、コトヤ(大変なことだ)、テンポニ、ヤカマシー(大変騒がしい)、テンポナ、ヒトデヤッタ(予想以上にたくさんの人出だった)のように、また副詞的に、テンポ、タカナイ力(すごく高くないか)のように使われることもあるようです。「てんぽ」は、元は中央語(京阪語)として江戸初期の文献使用例も確認できる「思い切つてするさま」

を表したテンポが北陸に伝播した後、福井県北部から石川県加賀地方などで「甚だしいさま。大変。たくさん」の意味に変化したものと考えられます。

数量的に不定のことを指す、ドンダケ(これだけ)は、ドンダケ コータ(どれだけ買った)のように使います。ドンダケは、ドレダケの「レ」が「ン」に音声変化した形です。

量が足りないことは、タランと表現されます。現在では一段活用動詞「足りる」の否定形タリンを使う人が多くなりましたが、近畿地方を中心とした西日本地域(北陸地方を含む)では、本来は五段活用動詞「足り」が使われたため、その否定形もタランでした。

数を数えることを、カソエル以外にヨムと言う地域(尾小屋など)もあります。カズ、ヨンドケ(数を数えておけ)のように使います。数字の「七」はヒチと発音されることが多く、「4人」のことをヨッタリとも言います。符津では、「人為的に数量が減る」ことをスバルとも言っています。

連載 105 程度や物の様子に関する方言 その1

本連載を始めてから9回目の師走を迎えました。昨年の12月は突然の寒波襲来で交通網が大混乱しましたが、今年は暖冬との予報も出ています。穏やかな年の瀬になることを祈りたいものです。

今回からは、「程度や物の様子」に関する方言をご紹介します。

ウマソナーナ子どももってて言われても

しばらく会わない間に背が伸びた知り合いの子に、デコ ナッタと言えば、「大きくなった」の意味です。つまり、「大きい」の意味でデカイが使われます。デケーハタケ(大きいへ広い)畑(の)のように、デケーと発音されることもあります。また、「大きい」と言えば、「子どもが丸々と体が大きく、丈夫そうである様子」をウマソナイ、ウマソ(ー)ナのように言います。小松をはじめ石川県内に広く聞かれますが、子どものようにウマソナーナとは、県外の人に恐怖とともに誤解されそうない方

ペッターラコイってどんな意味?

物の様子をさす方言に、ペッターラコイという言い方がありました。どんな意味かわかるでしょうか。「平たい」の意味です。言われてみればいかにも「平たい」感じのする面白い言い方です。

高さや値段が「高い」ことはタケー、「狭い」ことはシエマイ、シエハイ、シエメーです。「短い」ことはミシカイとも言います。

12月になり、これから段々寒さも厳しくなりますが、「寒い」ことをサバイと言います。これは、サムイの「ム」が、同じ両

唇を使う似た発音の「フ」に交替したもので、マ行とバ行の交替例は、「サビシー」と「サミシー」、「ケブリ」と「ケムリ」などにも見られます。

カタガルは北陸の気付かれにくい方言

ハスカイン ナットル(斜めになっている)のように、「斜め」のことはハスカイと言つことが多く、大杉では、ヒシニーワタル(斜めに渡る)のように、ヒシという言い方も聞きました。

斜めと言えば、北陸地方の広い範囲で、「傾く」ことをカタガルと言います。ウチャ カタガトル(家が傾いている)、エガ カタガトル(絵が傾いている)のようになっています。方言の衰退傾向の中で、カタガルが若い人たちにも使われるのは、カタガルを方言だと思っていない人が多いためです。このような方言を研究者たちは「気付かれにくい方言」などと呼んで、注目しています。

このテーマは次回(来年)に続けます。

連載  
106

### 程度や物の様子に関する 方言 その2

あけましておめでと(う)びびります。今年も引き続き、小松の方言のさまざまな世界を取り上げていきたいと思っております。

今回も前回に続けて、程度や物の様子に関する方言、中でも物の様子に関する方言をみていくことにします。

#### イツチョーライが歌になる

筆者の郷里福井には「いつちやびびり節」という民謡があります。子どもが盆踊りなどで踊った「いつちやびびり節」は歌手の鳥倉千代子と守屋浩が歌っていました。「いつちやびびり節」の「いつちやびびり」とは元来「蠟燭」だった一本でもし替えのないうそく「の意が」張羅(おぼろ)「たった一枚しかない晴れ着」の意と変化した語に由来する方言です。福井では「晴れ着」の意味だけでなく「一番よい」と。「一番よいもの」の意でも使われ、「いつちよらい節」の歌詞は福井が一番だよと

連載  
107

### 程度や物の様子に関する 方言 その3

今回も前回に続いて、程度や物の様子に関する方言のうちから物の様子に関する方言をご紹介します。

#### チコーは古い時代の発音の名残

物の様子で、ほかの物と「違(ちが)う」ことを、年齢の高い人たちは「チコー、モン」(違(ちが)うもの)のようにチコーと言います。学校文法で言うところのアワ行五段動詞(文語文法の八行四段動詞)の「買(か)う」が「コー、貰(も)う」がモローと発音されるのと同じような特徴です。この特徴は、小松だけでなく石川県内の広い範囲で聞かれるものです。

少し難しい話になりますが、このチコーのような発音は、かつて中世の時代に中央語(京都語)で起ったアウ[ɔ]連母音の長音化(アウ→オー)の名残です。京都などの近畿地方や福井ではいったんチコーに変化したアワ行五段動詞の終止形・連体形が、「ちがう」「かう」のような表

福井自慢を歌ったPRソングのような民謡です。最近では全国的に踊りのYOSA KO(よさこ)ーランがブームですが、福井ではYOSA KOーイチチョーライというのものもあるようです。小松でも「新品の服。流行の服」といった意で、イツチョーライノフク キテキタ(新品の服を着てきた)のように使われます。「とっておきの着物。最上の衣服。晴れ着」の意味でのイツチョーライ、イツチョーライは、北陸以外にも、中部・近畿・中国・四国地方などの広い範囲に分布します。

#### トグロマイているのは蛇?

トグロマクと言え、普通に思い出すのは蛇が丸く体を巻いている様子をさす言葉ですが、小松では、トグロマイテスワル(丸く輪になってすわる。車座になる)、トグロマイテ ハナシトル(丸く輪になって話している)のように、人に対しても使うということを符津の人から聞きました。

蛇と言え、蛇は獲物を丸呑みしますが、「丸呑み」のことを、マルノミ以外に、

記に影響されてチガウ、カウに戻ったのに対して、石川県では古い形をそのまま残したのと思われ。終止形・連体形でチコー、コー、モローなどの形が根強く使われてきた結果、別の活用形にもそれが影響し、チコワン(違(ちが)わない)、コワン(買(か)わない)のような形さえ生じているのは興味深い現象です。

#### ヨテは得意の意味

「ある人にとって(向いている)得意な様子を表す言い方にヨテがあります。ヨテノ シ「ト」ニ アタッタ(自分に向いた仕事にあたった)、ヨテンネー シ「ト」ヤ(自分には向いていない、得意でない仕事だ)のように使われます。「得意」の意味の「得手(えて)」の音変化形です。

#### ヒドイは共通語より意味が広い

ヒドイという形容詞は、共通語と同じ意味のほかに、「肉体的につらい」様子をさしても使います。例えば、酒を飲んで顔色の悪い人に「ヒドイケ」と聞いたりします。共通語と同じ形のために、それが方言

グットノミとか、マルンママ ノム(丸まます呑む)とも言います。

#### 「新しい」の反対は「古い」

正月と言え「新年」、つまり「新しい年」なわけで、小松でも「新しい」はアタラシイですが、「古い」はフルシイと言います。不思議な言い方のようにも思いますが、反対の意味の「新しい」が古典文法文語文法で言うシク活用型の「〜シ」となるため、ク活用のフルイをシク活用型に類推変化させたものと思われ、発想的には有り得ない形ではないのです。フルシ以外に、オソイ(尾小屋など)を使う人もいます。「古い」の意味のオソイは福井県嶺北地方にも分布します(福井には地域により「ひと」恐ろしい)の意のオソイも聞かれます。「古」と言え、魚が「古くなる」ことを、アノ サカナワ ナレトル(あの魚は古くなっている)のようにナレルと言います。「熱れ鱈」の「熱れ」と同じでしょう。

程度や物の様子に関する方言はさらに次回に続けます。

的な使い方と気付きにくい例です。

#### ホセホセンナルってどうなるの?

尾小屋で聞いたものに、ホセホセンナルという言い方がありました。「干せ干せになる」にあたる形で、「乾いてからからになる」様子を表したものです。ノドガホセホセンナル(喉がからからになる)のように使われます。

逆に物や食べ物水分を含むこと、湿気を帯びることをシミルと言います。ゼンペーガ シミツトル(煎餅がしけっている)といった具合です。シミルはほかに、冬に物が凍ること、凍るような0℃以下に気温が下がることを言う場合もあります。ケサワ テヌグイガ シミツトル(今朝は手ぬぐいが凍っている)のように言ったりします。

関連して、シムムは、シャツー アセガ シュンタ(シャツに汗が染みだ)のように、液体がものに染み込むことを言います。このテーマはさらに次回に続けます。



## 農業に関する方言 その2

北陸地方の5月は田植えの季節です。筆者も金沢大学着任後は、郷里に近くなったこともあって、毎年5月の連休には福井・越前市の実家に田植えの手伝いに行きます。新緑の里山を眺めながらの田植えはとても気持ちのよいものです。

という訳で、前回に続ける形で、田植えに関する方言から始めることにします。

## 「田植えをめぐる方言」

前回の最後に紹介したように、ナワシロダ、ノシロダ(苗代田)で苗代を作って育てた苗を、代掻きをした田に植えることとなります。今のように田植えが機械化される前は、苗を植える位置を決めるために、ワクという六角の木枠を転がして(ワクコロガシをして)田の表面に格子状の筋をつけました。その筋をつけた田のあちこちに、植えるための適量の苗を投げておくことを、ナエウチ(苗打ち)と言いました。

田植えが一旦終わったあと、植えた苗と苗の間に苗を植え足すことをマサシ(間挿し)と言います。また、田植えが終わったあと、植えもらした所や苗が浮いた所に補植することをウセウエ(失せ植え)、そのための苗をウセナエ(失せ苗)と言いました。マサシやウセウエは、田植えが機械化した現在でも行われますから、言葉としても生きています。

ところで、田植え前の田のアラオコソは前回も取り上げましたが、荒起このことを、ほかにタウチ(田打ち)とも言います。田の荒起こしなどに使った耕作用の馬は、タンマヤとかタンボウマと言ったようです。ニダシは、その馬に飲ませる米のとぎ汁のことです。

## 労働交換の「イーは「結」から

田植えに限りませんが、農繁期などにお金(賃金)のやり取りをせずに労働を交換し合うことをイーと言います。ユイとも言い、「結」の字があてられる、れつきとしたかつての中央語です。イー(結)の存在は、農村社会の強固な共同体社会を

支えていた要因の一つです。尾小屋では、イーシアンコ ショーサ(お互いに仕事の手伝いをし合おうよ)のように、イーのほかにイーシアンコとも言ったそうです。イーシアンコは「イー(結)し合いこ」からの変化形でしょう。

## 田植え終わりの「一斉の休みはヤシコ」

タウエ スンダラ ヤシコ センナンナ(田植えが済んだら田植え休みをしながらはいけいなね)。

かつての田植えというところ、朝の日の出とともに始め、夕方暗くなると苗を植える手許が見えなくなるまで続ける。そして、それが何日も続くという重労働でしたから(筆者の小学校低学年のころまではそうでしたから、昭和30年代半ばころまではそんな状況だったと思います)、田植えが終わって村全体で一斉にとる休み、ヤシコは重要な年中行事の一つでした。〈農業に関する方言〉は次回に続けます。

## 農業に関する方言 その3

6月は田植えが終わり、北陸の田には稲の苗を成長させるために水が張られます。現在の6月は旧暦の皐月。皐月の語源は、「サナエツキ(早苗月)の略称との説もありますが、皐月のサは、「耕作」あるいは「田の神」を意味した古語」と、「稲作の月」、「田の神の月」の意味として名付けられたとの説の方が説得力があるように思います。

ちなみに、小松では、サツキは旧暦5月をさす以外に、「田植え時期」の意味でも使われます。

では、今回も〈農業に関する方言〉を続けます。

## 「田植えをめぐる方言(続)」

今は田植機用の箱苗を育苗センターなどで作りますが、昔は自宅で種粉を発芽させ、それを苗代に蒔いて苗を育てました。その種粉のことはタネモン(粉がモンに変化)と言い、それを発芽させることを

メダシ(芽出し)、そのために種粉を漬けた池をタネイケと言いました。池を使わずに2日ほど湯につけることもありました。アトとは代掻きのことです。アト、シニカカル(代掻きを始める)のように使いました。苗代を作って種蒔きの準備をすることを、ナワシロオシメルとも言ったそうです。

## ヤシコ以外の農繁期の休み

5月の田植え時期の農繁期をサツキマエ(早月前)と言いました。

前回の最後に紹介したヤシコは、石川県に特有の言い方ですが、ヤシコが田植え終わりの一斉の休みを言うのに対して、稲刈り終了後の祝いの休みはカリアゲと言いました。また、ヤシコやカリアゲが田植えや稲刈りといった特定の作業の後の休みをさすのに対して、ヤスミギョー、ヤスンギョーは、農繁期の後の休み全般をさす言い方です。「休み業」に由来するものと思われる。

## アジエ(アゼ)とクロ

デンチ(田地)は田畑全般をさし、デン

バタとも言います。符津町では、開墾して田んぼにした土地をヒラギ、山を切り開いて畑にした土地をヤマヤブリ(「山破り」の意か)と言ったそうです。ムシカエシとは畑を耕すこと、尾小屋で聞いたナギバタ、ナギハタは焼き畑のことです。

平地での田んぼの境の畦はアジエ(アゼ)です。アジエ(アゼ)に多く植えて作ったことから、大豆のことをアジエマメ、アゼマメ(畦豆)と言いました。畦に対して、田んぼと田んぼに高さの違いがある場合、境の高い土手のことをクロ、ドイなどと言います。クロカ力はクロの草刈りです。

用水から田んぼへの水の取り込み口をミトグチ、ミナクチ、田んぼから水を出すための水の落とし口をシリミト、シリントと言います。ミトグチ、シリミトのミトは水の出入り口をさす「水門」が変化した形で、シリミト、シリントは「尻水門」です。ミナクチは「水の口」の意味で、ミナクチのナは今の「の」にあたる格助詞のナです。次回もまた〈農業に関する方言〉を続けます。

連載  
112

## 農業に関する方言 その4

## 水無月は「水濁れる月」の意味？

前回は、田んぼへの水の取り込み口であるミトグチ、ミナクチや、逆に水の落とし口のシリミト、シリントの話で終わりました。田植え後の田んぼには水が十分に必要で、それを取り入れるのがミトグチ、ミナクチなわけですが、7月は陰暦6月の水無月。漢字で「水無月」と書くことから、暑さがひどくなり水が濁れる月の意と解している人が多いようですが、水無月の「無(な)」は、本来「の」にあたる連体助詞「な(水上へみなかみ、水底へみなぞこ、水面へみなも)」で、むしろ陰暦6月が、田に水を引く月、田に水をたたえる月であるから、「水な(の)月」の意味という説が有力です。今回はそうした田んぼの水と関係のある方言から続けます。

## ツツミは堤防にあらず

ツツミというと「堤」の字を思い浮か

べ、堤防の意味と理解されそうですが、小松を含む北陸地方では広く、田んぼに水を供給するための「灌漑用の溜め池」をさします。灌漑用の溜め池を作るために人工的に堤(堤防)を築いたことから付いた名でしょう。ツツミの本来の目的は灌漑用なのですが、筆者の子どもころは、ちよっぴり危険な遊び場でもありました。というのも、山ざわや村の外れにあるツツミには鮒や鯉などの魚がいることが多く、休みの日によく釣り竿を持って釣りに行ったからです。

用水に水を引くために掃除などの作業をする雇われ人を大杉や尾小屋ではヨースイニンプ(用水人夫)と言ったとのこと

大杉では、用水路に水を入れることをミズアゲ、用水へ水を取り入れるための堰をユーと言いました。エザシとは、符津で用水と排水を兼ねた水路の言い方です。

## 水車はスイシャにあらず

かつて、米を搗いたりするのに使われた水車を、今ではスイシャと呼ぶのが普

通ですが、小松ではミズグルマと言ったようです。スイシャが「水車」の音読みであるのに対して、ミズグルマは訓読みの言い方になります。

ところで、かつては水車なども使ってたことのある精米作業(玄米を白米にすること)をウススリとかコメカチと言いました。ウススリは「臼摺り」、コメカチは「米かち」で、「米かち」のカチは動詞カツ(打つ、殴る)の連用形が名詞化した形です。同じ精米作業でも、ウススリという機械化された作業が想起されませんが、コメカチという、水車の力で玄米を搗いて白米にする、のどかな農村風景が目に見えます。

ウススリにまでたどり着くには、タカリ(田刈り)稲刈り)をし、ハサガケ(稲架掛け)をした稲のイネコキ(稲抜き)脱穀をした後、粉から粉殻を取り去って玄米にするモミスリが必要で、そのモミスリで出た粉殻をニカ、ヌカ、モミヌカなどと言います。

今回は「農業に関する方言」その5で

連載  
113

## 農業に関する方言 その5



現在ではほとんど見られなくなったハサに稲を掛ける様子

早場米地帯の北陸では、8月も末になると早稲の刈り取り風景が見られるようになり、今回の「農業に関する方言」はそんな稲の刈り取り時期に関する方言から始めます。

## 忘れられた「モミホシ」や「ジボシ」の風景

前回の最後でも紹介したように、稲刈りをしてハサガケ(稲架掛け)をし、イネコキ(稲抜き)脱穀)をすると、以前は、モミホシ(粉干し)とかジボシ(地干し)と

言って、天気の良い日に家の玄関先(カド) (大杉ではバンバとも言う)に籾を敷いて籾を乾燥させたものです。今は乾燥機で乾燥するようになり、そんな風景も見られなくなりました。

イネコキをするのは脱穀機ですが、脱穀機が登場する前に使われていた農具を大杉ではマンワと言ったそうです。筆者の郷里(福井・越前市)をはじめ、全国の広い範囲で、センバ(千把)とかセンバコキ(千把抜き)と呼ばれた農具のことです。

脱穀のときに出る藁屑をワラスベと言います。共通語的にはワラシベという言い方がありますが、その音変化形と考えられています。ワラシベに対して、稲の穂がついていた藁の芯の部分はヌイゴです。稲藁に対して藁をムンガラとも言いました。また、稲や藁を積み上げた稲藁はニユーと言います。

## 消えゆくハサ(稲架)の風景

これもまた、最近ではめったに見られなくなったものに、刈り取った稲を乾燥させるために立てるハサがあります。大杉

では、自分の家から離れた場所に立てたハサをノバサ(野稲架)とも言ったそうです。大杉では昔は8段、あとで7段で作ったと聞きました。ハサの横木はハサノコなどと言いました。

刈り取った稲を束ねるときには、後でハサにかけやすいように、また稲束を立てたりしやすいように、1把の半分ずつを交差させて縛ったものです。このようにすることをイナムジリと言いました。大杉で聞いた方言です。

稲の病気でいもち病というのがありますが、小松ではネツと言いました。ネツが ツイタは、「いもち病になった」の意味です。また、ネツの中でも、用水から田んぼへの水の取り込み口(ミトグチ、ミナクチ)付近が冷えて発生するいもち病をヒエネツと言いました。

農作物の収穫量は、サク(作)とかツクリ(作り)と言います。サクガツクリガヨカタ(よく収穫できた)と言ったりします。作物がよく実る年はナリドシです。

今回は「農業に関する方言」を取り上げます。

今回からは、職業に関する方言を取り上げます。この世界には、そもそもそれほど多くの方言が存在するわけではありませんが、古くからある職業や、今ではあまり見られなくなった職業の言い方には方言形も見られます。共通語化が進む中で、職業に関する方言（共通語形と同じものもあります）にはどんなものがあったかを見てみることにしましょう。

### 僧侶の言い方は宗派によって違いが

僧侶一般の呼び方はオボーサン、ボーサン、ボンサン、女性の僧侶の呼び方はアマサンですが、お寺の僧侶や住職の言い方は宗派によって違うことがあります。

北陸地方は真宗王国とよく言われますが、小松では浄土真宗のお寺の僧侶のことをゴボサン、ゴボーサマ、ゴボサマなどと言い、特に住職のことをゴインサン、ゴエンサン、ゴエンジョサンなどと言います。ゴボサン、ゴボーサマ、ゴボサマのゴ

ボ（し）は「御坊」で、元来、吉崎御坊、尾山御坊のように浄土真宗のお寺を指した言い方が僧侶を指す言い方に転化したものでしょう。また、ゴインサン、ゴエンサンは浄土真宗の住職の呼び名である「御院さん」、ゴエンジョサンは「御院住さん」に由来します。ワカサンは、若い後継の住職の言い方です。

同じ住職でも、浄土宗などではオシヨースン、曹洞宗などではホージョ（一）サンとも呼ばれます。ホージョとは「方丈」で、本来は一丈四方四畳半程度の広さを指し、そこに全宇宙が内在するという仏教思想から住職が生活する建物を指すようになり、それがまた住職そのものの呼び名になったと考えられます。

神社の神主のことは、カンナン、カンヌシサン、また、祈禱師のことはマジナイシという言い方がされました。

### ダンナサンとは警察官のいん

ダンナサンと言えば夫婦の夫に対する丁寧な言い方ということになりますが、以前は警察官、例えば村の駐在所のおま

わりさんのこともダンナサンと言ったそうです。その呼び名からは、かつて警察官が村の中でいかに敬愛されていたかが想像できます。もちろん、ジュンサ、ジュンサン、オマワリサンという言い方もあります。

医者については、オイシャサン、イシャのほかは、イシャのイがエに変化したエシヤの発音も聞かれました。

### バーコヤのバーコって何？

バーコヤと聞いても何の職業か分かる人は少ないでしょう。市中心部の龍助町で聞いた言い方ですが、バーコとは着物のことで、バーコヤは着物を売っている呉服屋の古い言い方です。ほかに呉服屋のことをタンモノヤ（反物屋）とも言ったようです。反物や着物を担いで売り歩く行商人はカズキウリと呼ばれました。カズキカスクは「担ぐ」の意味です。

〈職業に関する方言〉は次回に続けます。

今年の夏は、8月に入って記録的な猛暑に見舞われましたが、この暑さのせいで得をした職業、損をした職業、様々な影響を受けた職業があったに違いありません。今回も前回に続いて、職業に関する方言を取り上げます。

### 飲食業などを指す方言

「仕出屋」のことは、そのままシダシヤという言い方がある一方で、発音が少し変わったシダツシヤが市東部の山間部（大杉、尾小屋など）で聞かれました。リョーリヤという言い方がされることもあります。

ノミヤは、文字通り「飲み屋」あるいは「居酒屋」のことです。これも発音が少し変わったノンミヤという言い方が大杉、尾小屋などで聞かれました。

つい先ごろ終了した、NHKの連続テレビ小説「どんど晴れ」は、岩手・盛岡の老舗旅館を舞台にしたものでした。「旅館」のことは、最近でこそリョカンという

言い方が多くなりましたが、以前はヤドヤという言い方が普通で、龍助町ではハタゴとも言ったようです。モクチンとも言ったというキチンヤド（木賃宿）は、内湯のない食事と寝るだけの安宿を指し、それに対してウチユヤドとは内湯のある宿を指しました。旅館の「仲屋」とは、ナカイのほか、ナカエの発音も聞かれました。

### マッサージ師のアンマサは「按摩さん」か

マッサージ師のことは、共通語でもアンマ（按摩）という言い方がありますが、小松の方言ではアンマ、アンマサンのほか、末尾の「ン」が落ちたアンマサという形を大杉、尾小屋で聞きました。

今だとサラリーマンと言われるような人を、以前はツトメニン（勤め人）、ゲッキュートリ（目給取り）と言ったことの方が多かったように感じます。肉体労働を伴う日雇いの労働者のことは、ヒヤトイ、ヒヤトイニンブ、ニンブ、ニンブ、ニンソクなどと言いました。関連して、尾小屋では、

日雇いの労働のことをニンブシ「ゴト、ニンボなどと叫ぶたそつです。土木作業をする人は、ドカタです。

### 大工さん、左官屋さんの言い方

「大工」は、ダイクサン、ダイクで共通語形と同じですが、面白いのは龍助町や尾小屋町で聞いた「下手な大工」の言い方です。龍助町で聞いたカツツケダイクの語源は、よくはわかりませんが、金槌で釘を打つときなどに、下手で必要な場所以外にカツツケル（打ち当てる）という意味での言い方かもしれません。一方、尾小屋で聞いたカンシヨダイクのカンシヨ（閑所）は便所の意味です。「便所しか作れない下手な大工」とでもいうことなのでしょう。

「左官屋」のことは、共通語形と同じサカンヤサン、サカンヤもあります。カベヤサン、カベヤが一般的な言い方でした。

大工さん、左官屋さんなどの弟子は「テシ」また大工の手伝い人を「テ」と言ったようです。

〈職業に関する方言〉はさらに次回に続けます。

連載  
116

## 職業に関する方言 その3

今回も前回、前々回に続いて「職業に関する方言」を取り上げます。

## さまざま「商人」のさまざまな言い方

商売をする人、つまり「商人」については、大杉でアキナイヤ(商い屋)、シヨールバイヤ(商売屋から)、尾小屋でアキンド(「商人」から変化した語)、シヨールバイヤ、符津でアキナイニン(商い人)、そして龍助町でアキンド、シヨールバイヤ、シヨールニンなど、いろんな言い方が聞かれました。こうした言い方が存在することからもわかるように、「商売」そのもの、ことをアキナイと言ったようです。

小売の商人に品物を卸す「問屋」のことは、トンヤのほかにトイヤ(問屋。トンヤの元の形)という言い方も聞かれ、集落によつてはオロツシヤ(卸屋)の音変化形)と言つところもありました。

商人でも店を構えない「行商人」のことは、ギョーシヨールニン、ギョーシヨールという

言い方のほかに、カズキウリという言い方もあります。カズキウリのカズキは「両肩で荷を担ぐ」ことを意味する方言の動詞カズクの連用形にあたるもので、行商人の人が荷を両肩で担いで売り歩いたことから名付けられたものです。

行商でも特に魚を売り歩く人をボテと言いました。ボテは「棒手」で、魚を入れた籠や容器を天秤棒で担いで売り歩いた「棒手振り」に由来する言い方とされます。

今は鍋などが傷むとすぐに捨てて買い換える時代ですが、以前は鍋や薬缶に穴があいても修理して大事に使ったと言います。そのような傷んだ鍋や薬缶などを修理する職業が「鑄掛屋」でした。「鑄掛屋」のことはイカケヤとも、イカケ、エカケとも言いました。

「暫時もやまずに槌つ響。(中略)。」仕事に精出す村の鍛冶屋」と文部省唱歌「村の鍛冶屋」にも歌われた「鍛冶屋」のことは、カジヤのほかに、少し発音が変化したカンジャという言い方が聞かれました。

「八百屋」は、まさに八百屋が野菜「青草」を売るといふことで、アオクサヤ(青草屋)という言い方がよくされたようです。龍助町ではアオモノヤ、アオモノヤ(青物屋)、大杉ではヤサイモノヤも聞かれました。龍助町では、ほかに「米屋」でヘギヤ、ヘンギヤ、「乾物屋」でシオモンヤ、「酒屋」でニゴリヤという言い方も聞きました。シオモンヤは塩圧した魚も売ったこと、ニゴリヤは「濁り酒」を売ったことによる呼称でしょう。

## その他の職業の言い方

木を切ることを職業にしている人は大杉でコビキ、コビキヤサン、尾小屋でコビキ、コビキサン、龍助町でコビキサン、コビキサなどの言い方を聞きました。コビキは言うまでもなく「木挽」です。

山野で鳥や獣を捕らえることを生業とする「猟師」のことはリョーシ、あるいはテツポーウチ(鉄砲撃ち)です。

「職業に関する方言」は今回で終わります。

連載  
117

## 衣生活に関する方言

その1

いよいよ今年も師走を迎え、寒さも一段と厳しさを増してきます。雪国で暮らしていると、寒さを防ぐ冬の衣類には苦労するもので、今のように暖房器具が十分でなかった頃は、さまざまな衣類の工夫があったはずで。

今回からは、そんな衣生活に関する方言をしばらく取り上げることになります。

## 着物類を指すさまざまな方言形

日本人の衣服も、今はすっかり洋服中心になってしまいました。昔前は着物中心でした。今回はまず、そんな懐かしい着物(和服)関係の衣類の方言から見ていきます。

着物の総称として、大杉や尾小屋などでキモンという言い方を聞きました。キモンとは、キモノの「no」の母音「o」が脱落してンに変化した形です。

冬用の二重の着物をフタヨと言ひ、逆に浴衣のような、夏用の単の着物をヒト

ヨと言いました。

ところで、入浴後や夏に着る木綿の二重の着物をなせ「ゆかた」と言うかご存じでしょうか。「ゆかた」というのは、昔入浴の時に着た二重の着物をさす「ゆかたびら(湯帷子)」の下略形なのです。漢字では「浴衣」のほか、「內衣」とも書くことがあります。

大杉では、上着になる和服のことを言うナガギというのも聞きました。アワシエ(アワセ)は、裏地を付けた着物のことでもあります。

冬も寒さが厳しくなると、中に綿を入れた着物、ワタイレを着ることがありました。小松でも場所によつて、ワタイレが綿の入った着物の総称として使われたり、綿入りの袖のない着物など、その種類の称として使われたりするようです。

さて、ワタイレの中でも「袖無し」の胴着をさす言い方には、複数の言い方が聞かれました。大杉ではドンブク、尾小屋ではドンドコ、符津ではワタイレ、安宅ではドンギリでした。市内では、ほかに別の言い方も聞かれることになってい

大杉のドンブクはドーブク(胴服)から、安宅のドンギリはドーギ(胴着)からの音変化形と思われる。

ちなみに、筆者の郷里、福井県越前市の方言では「袖無し」の胴着のことをドーギンと言っていました。今でも正月に実家に帰ると、寒いときには洋服の上からそのドーギンを着ることがあります。ドーギンもドーギ(胴着)が変化した形です。綿入りの胴着でも袖があつて、着物の上に羽織るものをハンチャと言います。ハンチャはハンテン(半纏)からの音変化形の可能性があります。

サックリとは、農作業など屋外作業用に着た上着で、ちょうど柔道着のような感じの着物のことを言います。サックリは畑仕事や山仕事などで着ることからノラギ(野良着)とも言われました。ナガギの下を切つて作つたりもしたようです。

ほかに大杉では、単のもので着物の上から羽織るウワツパリの語も聞きました。

「衣生活に関する方言」は次回に続けます。

連載  
118衣生活に関する方言  
その2

あけましておめでとございませう。今年もまた小松の方言について、さまざまな角度からご紹介していきたいと思いません。引き続きご愛読下さい。

昨年一月の本連載の中では、晴れ着を着た女性の写真とともに、イッチョーライ(張羅)たった一枚しかない晴れ着」という方言形を取り上げました。正月には、晴れ着を着て、初詣に出かけた方も多いことでしょう。そんな晴れ着にちなんで、今回も衣類に関する方言をご紹介します。

## 晴れ着と普段着の方言

「晴れ着」や「よそ行きの外出着」のことは、「一番良い着物」をさす、イッチョーライ、イッチョーラのほか、尾小屋でエーモン、イーモン(振り袖や留め袖といった女性の晴れ着。よそ行きの着物)、安宅でヨソキ、エーキモノなどの言い方を聞きました。また、大杉では「普段着よりも少し良い外出着」をチヨッチヨギと言うとの

ことでした。チヨッチヨギのチヨッチヨが何の意味なのかは今のところよくわかりません。

それに対する「普段着」の方言には、ヘーゼーギ(ヘーゼーギ、ヘーゼーギの発音も)が多く聞かれました。「平生着」です。この、ヘーゼーギには、前号で紹介した、ドンブク、ハンチャ、ウワツパリなどが含まれます。「普段着の裏地」をトーシノウラというのを大杉で聞きました。

## 上半身に付ける衣類の方言

では、衣類の中でも上半身に身に付ける衣類の方言を見ていきましょう。

市東部の大杉で聞いたものとしては、「寝巻(寝間着)」「の古い言い方というネンネバ(小松ではネマキが一般的な言い方です)、「夜に子どもを背負ったときなどに羽織る防寒着」のハオリバ(安宅では、テラとも)、「死んだ人に着せる白い着物」のカンレーシャ(目の粗い薄手の綿織物を言う「寒冷紗」からか)があります。

同じく東部の尾小屋では、「よそ行きに、子どもを背負うときに着る袖付きの

として見るくらいになりました。

トンビ以下のものは、いずれも全国的に広く使われたもので、方言と言うにはふさわしくないかもしれませんが、最近ではほとんど使われなくなったものの呼称として取り上げてみました。

## 下半身に身に付ける衣類の方言

下半身に身に付ける衣類の方言としては、まず、パッチがあります。安宅町ではパッチ、パチとも言ったそうです。もとは木綿の布を縫って作った男性用の下穿きである「ももひき」の言い方として使われましたが、後には、男性がズボンの下にはいた下着であるスボン下、つまり今のスパッツに似た下着の呼称として使われました。パッチは、袴に似た衣服をさす朝鮮語バジが変化したものとも言われます。

また、尾小屋で聞いた「コシタ(股下)」からか、今で言うステテコの言い方です。同じく尾小屋で聞いたタツキは、「もんぺ」が登場する以前に女性がいいた下穿きをさした方言で、後にモンペと言われるようになりました。

綿入れ半纏」をさすネンネ「タンゼン」子どもを背負うときに着る普段着の袖なしの綿入れ半纏」をさすガメ」というのを聞きました。「着物の上に羽織のかわりに着る衣類で、単袖にカフスを付けたものをヒュージュンフクとも言ったようです。

海岸部の安宅では、「腰までの丈で、袖にレースが付いたガーゼの襦袢」をさすチンコジュバンという面白い方言も聞きました。符津のハンジバンと同じものでしょうか。

市南部の符津で聞いたものとしては、「ワール素材でできた防寒用肌着をさすジャケツ」の類の「ガーゼ素材の肌襦袢」をさすハダコ、「番下に着る袖の短い襦袢」のシタジバン(下襦袢)、「浴衣を着るときに着る袖部分がレースの襦袢」のハンジバン(半襦袢)、「冬用の襦袢」のフタヨノジバン(二重の襦袢)、「下着」のハダシャツ(肌シャツ)、「半袖の下着」特に綿素材のもの(「シタジャツ」下シャツ)があります。

衣生活に関する方言は次回に続けます。

連載  
119衣生活に関する方言  
その3

今回は前回に続ける形で、まず上半身に身に付ける衣類の方言から始めて、次に下半身に身に付ける衣類の方言をご紹介します。

## 上半身に身に付ける衣類の方言(続)

まず、前回で紹介できなかったものに、アツパツ、パがあります。アツパツ、パというのは、女性が夏に着る、作りの簡単なワンピースのような衣類の呼称です。ご存じない方は、ハワイのムームのようなものを想像していただくといいかもありません。

男性が和服の上に着た袖のある防寒具、外套のことをトンビと言いました。トンビは鳥の「鷲」で、形が似ていることから付いた名です。また、マントは洋服の上に着る袖なしの防寒具です。

ほかに、主に農村部で雪が降った時にかぶった「ゴザボーン」があります。かつては農作業などで雨よけに来たミノもありましたが、どちらも最近では古民具、民芸品

サルマタは男性用の下着パンツの古い言い方、オコシ(「お腰」からは女性が和服を着るときに身につけた腰巻をさす言い方でした。安宅町では、オコシをさすコモジという言い方も聞きました。このコモジは、室町時代に富中の女房たちの間で発達した女房詞のうち「文字詞」と呼ばれるものに由来します。「文字詞」とは、本来の語の一部に「文字」を付けて隠語的に使用された女房詞で、「じやも」(杓子)、「ふも」(鮎)、「こも」(鯉)などはその例です。コモジは湯を使うとき、つまり入浴時にこれを腰に巻いたことから「湯文字」と言うようになったもので、それがその後都の庶民語になり、それがまた地方にも伝わって方言として残ったものです。

男性の使った褌はモッコフンドシとも言われたようで、エッチューフンドシはモッコフンドシの半分の長さのもの、ロククシャクフンドシは長さ6尺の長い褌のことです。なお衣類としては新しいものですが、裾の広がったスボンをラツパズボンという言い方が、小松に限らず全国的に使われました。次回も衣生活に関する方言を続けます。

連載  
120衣生活に関する方言  
その4

今回は、前回の「下半身に身に付ける衣類の方言」との関連で、履物はきものの方言から見ていきます。

## ハクモン(履物)の方言

履物の総称としての方言はハクモンです。

伝統的な履物である下駄げたの類では、まず雨が降った時など、足下の悪いときに履く高い歯の下駄、つまり「高下駄たかげた」「足下駄あした」をアシダ、アシタと言います。アシダアシタの先につけて泥や雨水を防ぐ「爪皮つまかわ」のことは、ツマカケ、ツマカケです。

アシダ、アシタに対して、歯の低い下駄の類の呼び名で、カンカラ、ブクリを聞きました。カンカラとは、歯の高さが普通の下駄と高い足駄の間ぐらいの高さの下駄をさすようです。大杉で聞いたブクリは普段履きの歯の短い下駄のことだそうです。女の子が履く歯のない下駄には、カッポリ(龍助町、符津、尾小屋、カッポリ)

(大杉)、コッポリ(符津)、コッポリ(安宅)など、市内でも微妙に発音の違い方が聞かれました。

「草履くさろう」にはジョーリの発音が聞かれました。大杉では、草履や下駄の「鼻緒はなぞ」をハナズル、「鼻緒を上げる」ことを、ハナズルタデルと言ったそうです。

「靴」のことは、クツのほか、旧能美郡地域の方言の特色とされるクーツの発音(2拍名詞の1拍目の母音が伸びる)が安宅ほかで聞かれました。子どもが履いたゴム製の短い靴はタングツ「短靴」から、今言うサンダルのような履物の総称はツツカケです。作業用に履くゴムの「地下足袋かたび」は主にジカタビと言われますが、大杉ではチカタビの発音も聞きました。

## 衣類の紐や糸に関する方言

衣類と言えば、紐や糸がつきものです。「紐ひも」のことはヒボという言い方が聞かれます。ヒモのモ「mo」の「u」が、発音の仕方が似ている「u」に変わったものです。「赤ん坊を背負うときに使う紐」はオンブヒモ、オブヒモです。大杉では紐の類で

ホソクグリ(腰紐)、シャデ(真田紐)なども聞きました。

「糸いと」木綿糸の言い方には、中世末期の古語に由来するカナが尾小屋や符津で聞かれました。布団の綴とどじ糸に使う太い木綿糸をトーキョーガナ(龍助町)とも言ったそうです。紐や糸というと、結び方の種類を言う方言もあります。「2回結び」にはカナムスビ、カンカラムスビ、カンナムスビ、「ほどけないように固く結ぶ1回結び」にはソノムスビ、オトコムスビ、「蝶々結び」にはチヨームスビ、オンナムスビ、「片方だけの蝶々結び」にはカタムスビ、ヒットキムスビなどの言い方が聞かれました。

「糸いと」もつれることは、市内でも、ムスバル(大杉、尾小屋、ムタケル(大杉、符津)、ムスバカル(尾小屋、ムダカル(安宅)、ムタムタニル(龍助町)など、いろいろな言い方があります。

来月は4月。学校もまた新年度が始まります。〈衣生活に関する方言〉はここで一旦終わり、次回は〈教育に関する方言〉を取り上げる予定です。

連載  
121

## 教育に関する方言 その1

今年もはや4月。新しい年度がスタートします。すでにご存じの方もいらっしゃると思いますが、金沢大学は、開学以来の大規模な改組で、新年度より、これまでの8学部体制から3学域16学類体制に移行します。私の肩書きも人間社会学域教授に変わることになりました。

本連載も98年4月にスタート以来、今月からいよいよ11年目に入ります。今後ともご愛読下さい。

ところで、新年度と言えば、子どもたちを含めて、誰もがまず思い浮かべるのが学校生活での新年度でしょう。今年も全国各地で、さまざまな入学や進級の風景が見られるに違いありません。学校と言えば「教育」。そこで、今回からは〈教育に関する方言〉を取り上げてみようと思えます。

## 学校教育と方言の関係

〈教育に関する方言〉と聞くと違和感

を覚える人がいるかもしれません。明治後半から戦前まで、我が国の学校教育は、「方言撲滅・方言矯正」をスローガンに掲げ、子どもたちに原則「標準語」(戦後は「共通語」という言い方がされるようになり)を教えてきました。戦後から現在までも、学校(特に教室場面)は一般に共通語中心の世界と認識されています。最近のように方言が見直される時代になっても、教科書に方言が登場するのは国語の教科書のごく一部ぐらいでしかありません。そのため、私たちは学校で使うことは、特に先生が授業で使うことは共通語なのだと思込んでしまっているところがあるようです。

しかし、教育の世界とて方言と無縁なはずはありません。教科書の中のこととは確かに原則共通語ですが、地域の子どもたちが学校で共通語だけの生活をしているわけではありません。場面や相手によつて無意識に使われている話しことばとしての方言は、まだまだ健在です。先生が授業で使っていることばにも、意外な方言が含まれていることがあります。

## 気づかれにくい「学校方言」の世界

学校で校歌の練習をするときなど、歌詞のまとまりをさして皆さんは何と言おうでしょう。小松出身の人であれば卒業式の練習のとき、音楽の先生が、「今日は校歌の1タイムの練習をしましょう」と言うのを聞いたとしても不思議に思う人はいないはずです。ところが、この歌の歌詞のまとまりをさす「くタイム(題目)」という言い方は、石川・富山両県でしか通じない、れっきとした方言なのです。隣の福井県を含め、他の45都道府県では1バン(番)、2バンとしか言いません。「くタイム」は、学校で先生が使っているから共通語(つまり方言ではない)と思われているのです。このような例を方言の専門家は「学校方言」と呼んだりしますが、次回の〈教育に関する方言〉は、「学校方言」として知られる全国のいくつかの例のご紹介から始めたいと思っています。

連載  
122

## 教育に関する方言 その2

前回ご紹介した、石川・富山両県における「学校方言」(「教育方言」とも言われる)の代表とも言える、歌の歌詞のまどまりをさす「くダイメ(題目)」に似た例は、全国的にも少なからず存在しています。今回は、石川県以外の地域での「学校方言」の例のご紹介から始めたいと思います。

## 富山県のガンピ、愛知県のビーシなども学校方言

学校、特に小学校で掲示物などによく使う模造紙と呼ばれる紙があるのをご存じでしょうか。この模造紙の呼び名には、全国でいくつかの「学校方言」が見られ、例えば、お隣の富山県だけで通用する呼び名に「ガンピ」、愛知県、岐阜県で通用する呼び名に「ビーシ」というのがあります。ガンピは模造紙が高級和紙の「雁皮(紙)」「金沢の金箔の箔打ち紙に使われているものでそれを利用した油とり紙を想像していただくといいでしょう)に似

ていたところから、ビーシは模造紙がA4とかB5とかいう紙の大きさのB規格の最大の大きさであることからついたものです。

ほかには、宮城県で運動着のジャ、ジのことを言う「ジャス」、山形県で①(マ、心イチ)、②(カツ、コイチ)を言う「イチマル、イチカツ」、新潟県で教師が生徒をあてることを言う「カケル」、九州の宮崎県、鹿児島県などで黒板消しのことを言う「ラール」なども「学校方言」の例になり、それぞれの地域では、学校で先生が使っていることから、方言だと気づかれにくい場合がほとんどです。一般には共通語が使われる場面と思われる学校で通用しているからこそ、逆に若い世代にもしつかり方言が受け継がれているという興味深いケースです。

## コーカ(校下)も北陸を中心とした方言

では、あらためて小松の方言に話を戻し、「教育に関する方言」を見ていきます。小松を含んで、石川・富山両県で使われる、歌の歌詞の「くダイメ(題目)」に似

たものに、「コーカ」があります。コーカとは、小中学校の通学区を指す言い方で、共通語は「学区」ということになっていきます。コーカには「校下」の漢字が当てられ

明治以降に学校行政用語として用いられるようになったと考えられるものです。もともと「県下」「城下」の「く下」と同じ言い方として関西地方で生まれたものが、北陸にも伝わったのだらうと考えられています。関西から西の広い地域では、その後西日本共通語的に「校区」が使われるようになり、「校下」は現在では、北陸三県と岐阜県の一部を中心に使用されています。これも行政用語として用いられていることで方言とはあまり意識されていないのですが、れっきとした方言なのです。

ちなみに、外からの人の入り込みが多い金沢市内では、「校下」「学校の下」の意味あい(に)反発する保護者もいて、学校によっては、西日本共通語の「校区」への言い替えを始めています。

次回も「教育に関する方言」を続けま

連載  
123

## 教育に関する方言 その3

今回も「教育に関する方言」を続けま

## 学校で使用する道具の方言

「筆箱」「筆入れ」には、フデバコ、フデイレバコなどを聞きましたが、フデバコの方が一般的な言い方だったのでしよう。その中に入る「消しゴム」はゴムケシ(「ゴムケシ」では、「ゴムを消す」の意味に取れ、日本語の語構造からすると例外的ですが)で、ジケシ(字消し)という言い方も聞かれました。

今では知る人はほとんどいなくなりましたが、昔まだノートなどなかった時代に、ノート代わりに使った石の板をシエキバン(セキバンとも)と言いました。「石板」からです。そのシエキバンに小さな字を書くときに使った筆記具をシエケツと言ったそう。今で言えば鉛筆にあたるものです。80歳代のある人からは、学校で鉛筆を使うようになったのは高等小学校

の頃からこの話を聞きましたので、今から70年ほど前まではシエケツを使っていたことになるのでしよう。

「鉛筆」に対しては発音レベルで、かつてエンペツの発音も聞かれました。

同じシエキバンに大きな字を書くときに使った筆記具はゴフンと言ったそうです。「胡粉」からでしようか。今のチョークのようなものですが、昔はそのチョークのようなゴフンで教師は黒板に、生徒はシエキバンに字を書いたそうです。

そのゴフンに代わって使われるようになったのが、今のチョークです。そのチョークのことを以前はハクボクと言いました。「白墨」です。おそらく、今は小学校でハクボクと言う先生はほとんどいなくなってしまったでしよう。

「ノート」も、今や学校ではノート以外の言い方が使われることはないと思いますが、現在の50歳代以上の世代ですと、小学校時代あたりにチョーメンと言っていたという人も多に違いありません。筆者もその一人です。チョーメンは漢字で「帳面」と書きます。そのチョーメンの間

に挟んで字を書くときに使う「下敷き」を、以前はシキバンと言ったそうです。尾小屋で聞いた語です。「敷き板」からでしよう。

「本棚」のことは、ホンダナ以外にホンバコ、ホンタテが聞かれました。ホンバコの方が古い言い方のように思いますが、人によっては、大きいのはホンダナ、小さいのはホンバコと区別するという人もいました。

## 子どもを評価することばの方言

教育と言えば評価がつきものです。「利口」で聞き分けのよい子「はカタイコ(カテーコの発音も)」と表現されます。形容詞カタイ(カテー)が「利口」で聞き分けのよいの意味となります。ハツメーナコ(発明な子)は「知恵のある利口な子」の意味です。逆に、「出来の悪い、駄目な子」はダツチャンボー、ダツチャンネンネのように表現されたよう。ダツチャンは「埒明かん」からの変化形で、「駄目だ」の意味です。